



サイボーグコーチ

---

MASAYO

I

---

磐田 匠

---

1

季節なんかなくなればいい。雅美はそう思った。

生命のいぶきあふれる春も、

子供たちの嬌声が木々の梢を揺らす夏も、

学生たちが体育祭や学園祭でかけがいのない思い出を紡ぐ秋も、

恋人たちが白い息で未来を語り合う冬も・・・

季節なんかなくなればいい。刻の流れなんて止まってしまえばいい。

一つの季節が終わればまた新しい季節がやってくる。

齢が重ねられていくたび、雅美の身体はやせ細り、弱々しくなっていく。

小学校の頃はまだ大丈夫だった。体育だけはいつも見学だったが、それでもまだ普通の小学校に通うことができていた。しかし、中学に上がった頃から、雅美の心臓はすこしずつ彼女の言うことをきかなくなっていく。高校は入学式にでたきり、一日も出席していない。

「先天性なんかかんとか症」という立派な病名があるらしい。

雅美には同年代の友達はほとんどいない。

病院の「学校」には中学部までしかクラスがないからだ。

雅美の病棟（心疾患病棟というらしい）の高校生くらいの子は、病院の「学校」には行かず、もとの高校に復学できる日を夢見て部屋で一人、勉強している。

外科には、たまにはあるけれども、高校生くらいの子が入院してくる。

ある年の夏・・・雅美は入院してきた高校生の男の子と知り合った。

最初は遠くから見ているだけだった。

勇気をだして話しかけた。

男の子は輝という名前だった。部活の帰り、事故で骨折したと輝は言った。

部活って何をしているんだろう。

どんな音楽を聞くのだろう。

どんな女の子が好きなんだろう。

...私のことをどう思っているのだろう。

彼に聞きたいことは山ほどあった。

でも、

でも。

輝はやっと雅美の名前を覚えた頃に、何の前触れもなく退院していった。

二、三回手紙がきた。雅美も手紙を書いた。

春を迎えるころ、輝からの手紙が途絶えた。

高校三年生の秋、雅美は母に本をおねだりした。いつか、奇跡が起こって、自分の身体が自由に動くようになったら。歩いても走っても苦しくならず、息切れもしないような身体になったら。大学に行きたい。

大学には、輝のような元気な青年がたくさんいる。

たくさんの友達ができる。

その頃から難しい学術書が雅美の友達になった。

母が突然の事故で亡くなった後も、父や祖父が雅美の欲しい本を送ってきてくれた。

父も祖父も、ほとんど見舞いにはやってこない。

忙しいんだ、きっと。雅美はそう思い込むようにしていた。そう思わないと（モシカシタラ）、哀しくて（ワタシハ）、悲しくて、（ミステラレテシマッタノ？）壊れてしまいそうになる。

相対性理論も、量子力学も、電磁気学も、

ケプラーの法則も、公転周期も、

英語も、フランス語も、ドイツ語も、

地理も、日本史も、世界史も、古典も、現代文学も、

全部わかったけど...

でも、雅美は孤独だった。

雅美はある日、真美という少女と友達になった。

中学三年生の真美は、自分の病気のことを何も聞かされていなかった。

「あたしね・・・」

真美は言った。それはひさしぶりの散歩の日だった。パジャマにカーディガンを羽織っただけの格好で、二人は病院の中庭にいた。十メートルほど後ろから、それぞれの担当看護師がついてくる。

「病気のことは何も聞かされてないんだけどさ、実はすごい病気だったりしてね」

（そんなわけないよ。だって真美ちゃん明るいじゃん）

「なんかの小説であったじゃない、病室から見える木の葉っぱのさ、最後の一枚。その葉っぱが落ちたら死んじゃうなんてさ」

（真美ちゃん、顔色だってあたしよりぜんぜんいいじゃん。この前も病院の中庭走ってたじゃん）

「あたしの病室からだったら・・・この木かな」

真美は病院の中庭の大きな木を見上げた。その巨木は青々と茂り、まるで命の象徴のようにそびえている。

「あらら。すごい元気そうな木だよね。冬になっても葉っぱとかありそう。だめだこりゃあ」

（そうだよ。真美ちゃん大丈夫だよ。私、こんなにガリガリでも生きてるもん）

真美の容体はその夜、急変した。真美が亡くなったことを雅美が知ったのは翌日のことである。

「真美の木」の物語は翌日から雅美の物語になった。真美が亡くなった夏のあの日から、「真美の木」の葉が一枚一枚と落ちてゆくたび、雅美は自分の生命が削られていくような気持ちになっていった。

「香坂さん、香坂雅美さん・・・」

雅美はゆっくりと目を開けた。

かすむ視界の向こうに、担当の中年看護師の顔があった。

「香坂さん、いいお知らせよ。今日ね、おじいさまがお見舞いに来てくださるらしいの。お父様とお二人でずっと続けてこられていた研究が、やっと形になりそうなんですって」

雅美は外を見ようとした。

首をほんの少し動かすだけのその動作が、ひどく億劫なことのように感じられた。五センチほど顔が動く。

窓の外で風に揺れる「真美の木」が見える。

真美の木は冬の風に揺れている。風に揺らされるその枝の先、残された最後の一枚の葉。

その葉が・・・「真美の木」の最後の一枚の葉が・・・雅美の目の前で・・・散った。

涙が流れた。理由もなく。

（遅いよ・・・おとうさん・・・おじいちゃん）

視界がぼんやりと霞む。

看護師の声がかんたんと遠くなっていく。

雅美はゆっくりと瞳を閉じた。

遠くで・・・遠くで・・・

看護師が雅美を呼ぶ声が聞こえる。

担当医師が大声でわめいているのが聞こえる。

あれは・・・おじいちゃんの声。

おとうさんの声。

みんなでなにか言い合いをしている。

遠くで・・・遠くで・・・

さようなら、みんな・・・

さよ・・・ら、み・・・

2

突然、低いバッテリーのモーター音がした。視覚回路が接続される音だ。突然、目の前が真っ白になった。白色調整。早く！ピント調整。コントラスト調整。室内光量分析。光源は室内用蛍光灯。百ワット形。二十本。調整完了。

やたらと広い研究室のような部屋。

コンピューターのモニター画面のようなものが正面にずらりと並んでいる。

雅美はその広い部屋の中央、お姫様が座るようなふかふかクッションの椅子に座っていた。

そこにはなぜかおじいちゃんがいた。

「おはよう、雅美」

おじいちゃんがここにいるということは、ここは天国ではないわけで。

天国ならおじいちゃんよりおかあさんがいるだろうし。

おじいちゃん・・・

雅美はそう言おうとした。しかし。声がでない。どうしたの、私。どうなってるの、私の身体・・・

「ああ、そうか。言語のプロパティの初期登録がされていないんじゃないかな。雅美、今見えている画面の左上にある設定のところをクリックしてごらん」

設定をクリック。

性格・サウンド・音声・感情・言語・・・

様々なアイコンが並んでいる。言語をクリック。

音声認識・言語理解度・言語学習機能・言語発音機能・・・このアイコンだ。

基本言語選択。日本語・英語・フランス語・・・日本語のダイアログボックスにチェックを入れる。日本語発音のサブメニューが開く。

使用地域言語。標準語・北海道弁・東北弁・・・これはどういう意味なんだろう。適当にクリックしたら、関西弁のダイアログボックスにチェックが入った。

またサブメニューが開く。大阪弁・河内弁・京都弁・神戸弁・・・また適当にやったら、大阪弁にマークが入る。

年齢フィルター。なんだこれは。年齢を答えるのかな・・・とりあえず十九のボックスをチェック。

性格フィルター。なんなんだこれは。適当にクリック。『キャピキャピ』という項目が反転表示された。

設定を変更しますか？はい・いいえ・キャンセル・・・はいをクリック。

設定を変更しています。ポインターが砂時計になった。

設定が変更されました。のメッセージ。

「てか、なんなんこれ。じいちゃん」

やっと声が出た。

「お誕生日おめでとう、雅美。今日がお前の誕生日だよ」

「お誕生日とか言われても、ほんま、うち、困るし。てか、じいちゃん、うちのことほってたし。てか、なにしてたん？」

ものすごい違和感。喋りながら設定画面をもう一度開く。性格フィルターのキャピキャピを解除し、その下の「しっとり女子高生」というのを選ぶ。同時に大阪弁モードのサブボックスで標準語と大阪弁の変換比率を操作する。関西弁使用比率の目盛りを七十から三十へ。

設定を変更しますか？はい。

「お誕生日とか言われても、あたし、困るわ。でも、おじいちゃん、あたしのことほってなにしてたんよ」

言葉の違和感は少しましになった。

「うふふ、お前はもう知っておるはずだよ。重い心臓病の雅美のために、私がやってきたことをね」

そう言われて今、気がついた。

言語のプロパティってそもそも何なの、これ。どうしてその操作方法とか知ってるの、私は。視界の隅にずっと見えてるパソコンの枠みたいなものは何？画面に出たり消えたりするこの矢印みたいなのは何なの？

なに？なに？何なのよー？

・・・でも・・・私は・・・なぜだかいろいろなことを知っている・・・

病院の雅美の記憶とは別の、もう一人の自分の記憶・・・

そもそも祖父は日本有数の、いや、世界でも指折りのロボット工学・アンドロイド工学・サイボーグ工学の権威だ。

ロボットとアンドロイドとサイボーグは厳密には明確に区別されている。

ロボットは人間が操作するもので、マジンガーZや鉄人二十八号みたいに操縦されるものだ。工場のロボットアームだとかプールの清掃ロボットなんかもロボット。ただ動くだけではなく、状況に応じて動きを変えたり、刺激に対してどのように反応するかをプログラミングされているものもロボットである。さらに高度なもので、独自に思考・判断できるものもロボットである。ドラえもんやヤッターワンなどがそれである。

ロボットのなかでヒト型、等身大のものがアンドロイドと呼ばれる。変身前のキカイダーやアトムがこれにあたる。キカイダーの仇役である「ダークのアンドロイド」をヒト型等身大の「アンドロイド」と呼ぶか否かは議論の分かれるところである。これをアンドロイドのカテゴリーに入れてしまうと、ヒト型等身大で二本足歩行のできるドラえもんはアンドロイドであると結論づけなければならない、「未来の世界の猫型ロボット」という彼のパーソナリティーが崩壊してしまう。これに関しては研究者の判断にゆだねられるところとなりそうである。

サイボーグの定義が難しい。基本的には人体の一部に機械を埋め込み、行動力や活動力を向上させたものがサイボーグ、と少年雑誌は定義していたが、人造の機械仕掛けの義手や義足をつけた人はサイボーグなのかと言うとそうではない。携帯の人工透析器を着けた人や人工心肺を埋め込んでいる人もサイボーグとはいわない。人工毛髪や入れ歯の人もサイボーグとは言わない。でも

サイボーグ大作戦やバイオニックジェミーはサイボーグだし、ゼロゼロナインも誰が何といってもサイボーグなのだ。まあ、ここでは脳の一部または全部が人間のもので、なおかつサイボーグ手術を受ける以前の記憶をそのサイボーグが有していることを条件としておく。だから仮面ライダーはサイボーグで、ロボコップもサイボーグ（でも映画の前半はアンドロイド）。ハカイダーは人間の脳が頭に入っているけれども、博士の脳の記憶を残していないからアンドロイド。こういうどうでもいい知識も雅美は有していた。

話を戻そう。

とにかく雅美の祖父はそういう「ロボット工学」の権威だったわけである。

しかし、雅美の心臓病が悪化したのと時を同じくして彼は研究の第一線から姿を消す。祖父の助手として共同研究を行っていた父も、同時期に工学の表舞台から去った。

そして二人は、独自に一体のサイボーグの開発をはじめた。

いつかその生命を散らすであろう雅美の生命を受け継ぐものとして・・・

「ということは、私、死んだん？」

関西弁の設定を変更することも忘れて、雅美は言った。

「ワシと雅也が駆けつけたときには、すでに危険な状態じゃった」

「そこで、先生と私は、お前の身体に、バイオノイド移植手術を、実行したわけなんだよ」

機関車トーマスのナレーターのような口調で、父が言った。

「バイオノイド移植？」

バ・イ・オ・ノ・イ・ド。検索。雅美は聞き慣れない言葉の検索を開始した。

検索結果。該当件数なし。

「これはワシが開発した画期的な方法じゃ。人間の脳が有している全情報を電気信号に置き換え、圧縮し、初期化した別の脳にコピーする。雅美の場合、空き容量にスーパーウインドウズセブンと各種辞書ならびに各種文献をハイパー圧縮してインストールしている。さっき雅美が操作した言語調整機能もサイボーグ用のスーパーウインドウズをOSとして使用している、どうだ、まいったか」

・・・じゃあ、私の「脳」は・・・「初期化された」、誰か別の人の・・・「脳」？

「きゃああああっ」

気持ちわるい気持ちわるい気持ちわるい！

そのとき雅美の視界の端の、遠くに見えるパソコンのモニター画面に、キモチワルイキモチワルイキモチワルイという文字が現れた。

どうやら雅美の思考は別のコンピューターでモニターされているらしい。

「安心しなさい。お前の脳は正真正銘、香坂雅美の脳だ。残念ながら一部だがね」

「・・・？一部？一部って、どういうことなん？」

「危篤状態に陥ったお前はここに運びこまれた。バイオノイド手術はお前が活着している状態で行わなければ意味がない。脳が電気信号を発している状態でないと正確なコピーがとれないからだ。ぎりぎりの状況でお前の手術が始まった・・・」

覚えている。眠る私の髪がすべて剃られ、頭蓋切開手術が行われる。手術を受ける私を見ている

もう一人の私・・・

「お前が持っているもう一つの記憶。それは香坂雅美という一人の人間の思考をわけあい、強力なCPU（中央演算装置）でその不足部分を相互にカバーしあった、もう一人の雅美の記憶なのだよ」

「もう一人の私・・・」

「この研究室の全てを管理する、ハイパーコンピューターMASAMIの記憶だ」

微かに、床が振動したように感じた。

コンピューターのディスプレイが一斉に作動する。

白い背景に様々な色のラインアート。

画面のアートパターンが徐々に一つの画像を形づくっていく。

顔だ。誰かの顔が浮かびあがろうとしている。

誰の顔？

私？

いや、似ているけど、違う。

私はこんなにかわいくない。もっとぎすぎすに痩せている。

まるで・・・天使のような顔だった。

「はじめまして、もう一人の私。私がハイパーコンピューターMASAMIのホストキャラのMASAMIです。よろしく。仲良くしてね」

「あ、そんなん・・・こっちこそ、よろしくお願いします」

「ちょっと混乱したでしょ。私もそう。おじいちゃん、良い科学者なんだけど、ちょっとセンスに欠けるとこあるから。第一、このキャラだってそうだよ。ふつうこんなアニメみたいなことしないわよね。コンピューター画面の中にCGで顔の画像出すなんて。この顔ってさ、雅美ちゃんの小学校時代の写真をモデルにしてさ、心臓の病気なしに健康的に成長したらどうなるかってシミュレーションして作ったんだって。センスないでしょ、やることが。オタクはいつてるわよね。女の子なんだからさ、恋もすりゃ男にだまされたりとかもするじゃない、普通。そしたら顔つきとか目つきとか変わるじゃん。こんな天使みたいな顔の奴、いないっつーの」

雅美はMASAMIと良い友達になれそうな気がした。そりゃそうだ。今は二つに分かれはしたが、元々ひとつの人格なんだから。

「あ、おじいちゃん。それと、雅美ちゃんの身体のこと、おじいちゃんの口から早く説明しといたほうがいいよ。女の子って、そういうことに敏感なんだからね。ということで、雅美ちゃん、MASAMIそろそろ消えるわ。ほかにやんないといけないこと、けっこうあるんだよ。じゃあね」

しゃべりたいだけしゃべって、MASAMIは消えた。

ディスプレイは元の状態に戻った。

全ての画面は、通常のコンピューターのモニタースクリーンとして施設管理画面や研究室の実験データ表示画面などに戻っている。とてつもない静けさが部屋に戻った。

静寂。

雅美は自分に起こったことを整理しようとしたが・・・考えてみれば雅美の身に起こったことで彼女にわからないことはない。当然だ。雅美の記憶の半分は自分自身の「バイオノイド手術」に深く関与していたスーパーコンピューター、MASAMIの記憶なのだから。

しかし知識と記憶の整理と統合は必要だった。

まず、雅美。彼女は「先天性なにかかんとか症」という重い病気で入院生活を送っていた。ある年の冬、彼女は危篤状態に陥る。そこに超ひさしぶりに見舞いにきた祖父は、雅美へのバイオノイド手術を決意する。祖父らは担当医師の反対を押し切り、雅美を研究室に搬送し、バイオノイド手術を決行した。ここまでが雅美の物語。

つぎにMASAMI。MASAMIはバイオノイド計画の初期から参加していた。その計画は当然、雅美の残り少ない『生』を延長させるという構想がスタートラインであった。祖父と父は寝食を忘れ、雅美の見舞いを忘れて研究に没頭した。そしてその研究が最終段階を迎えようとしたとき、雅美の状態が悪化した。雅美は急遽搬送され・・・ここまでが雅美の中にあるMASAMIの記憶。手術開始にあたって記憶回路を一旦遮断し、そこまでの記憶をコピーしたためであろう。

しかし・・・

MASAMIは気になることを言っていた。

『身体のこと、おじいちゃんの口から早く説明してあげたほうが・・・』

どういふことなのだろう。

「あの、おじいちゃん・・・いまMASAMIちゃんが言うてたやんか、雅美の身体のことってどういふこと？」

祖父は黙っている。機関車トーマスのナレーターのトーンで父がとつとつと語りだした。

「雅美、お前の身体はね、バイオノイド手術に、耐えることができなかった。うん。衰弱・・・しきっていたんだね。脳のコピーをね、行っている途中にね、心停止してしまった。父さんたちは迷った。雅美の記憶をとるか、雅美の肉体をとるか・・・脳のコピーと、脳の蘇生手術を優先させれば、肉体細胞の一部が使用不可能になるくらいの、時間がかかってしまう。肉体の蘇生手術を行えば、かんじんの雅美の脳が死んでしまう。結局、わたしたちは雅美の記憶の根源である、脳を、選んだんだね。雅美の身体は今、地下の冷凍保管室で冷凍保存されている。ただ、残念なことに体内の重要な器官のいくつかがすでに死んでしまっている。それらの細胞の再生技術が確立すれば、もとの身体に戻れるんだけど、今の我々の科学力では、ここまでが限界だったんだ」

私が、手術中に、心停止した・・・祖父と父は、私の脳を優先して助けた。じゃあ、この身体は・・・誰のもの？

沈黙していた祖父が口を開いた。

「雅美、よくお聞き。脳工学の研究やサイボーグの研究には莫大な研究費がかかる。この研究室を維持する費用や研究費はすべて政府の国家予算から捻出されている。お前も大人ならわかるだろう。おじいちゃんにとっては雅美ひとりのための研究であっても、政府にとってはそうではなかった・・・しかし、だからこそ莫大な研究費の援助があった。この研究室に政府が期待して

いたのはね、最強のサイボーグだったんだ」

父が続ける。

「最強というかね、どんな環境でも最高の能力を発揮できる、サイボーグなんだね。例えば放射能汚染された地域での救援や調査。深海でのデリケートな作業。過酷な状況下での仕事。普通の人間ならこなすことのできない、過酷な状況下で活動できる、夢のサイボーグ。どうだね、すばらしいと思わないか？」

「え？ちょっとまってえな。この状況で私にこういう説明するということは、その夢のサイボーグって……」

「そう、お前だ。雅美の身体は心停止してしまった。そこで我々は、雅美の記憶の受け皿として、政府の援助をうけて完成しつつあったスーパーサイボーグのなかに圧縮に成功したお前の脳とMASAMIの記憶データを移植したのだ」

頭がくらくらしてきた。めまいも少々。それは手術の後遺症などでは決してないことは明らかだった。

雅美は泣いていた。泣いたというのは心理的に泣いたというだけで、実際に涙がでたとか鼻水がたれたとかいうことはない。

その後、雅美は大きな鏡の前に連れていかれた。

そこにはもうかつての雅美はいなかった。

「腕、太っ！」

「足、太っ！」

「肩幅、広っ！」

「乳、でかっ！」

これが正直な感想だった。

現在のサイボーグ工学の技術では、腕や足などを人間のようによく細くすることは困難である。基本骨格に稼働マシンを装備させ、筋肉の代わりにクッション材で保護する。その上に人間の皮膚そっくりの人工皮革で全体をカバーする。複雑な機械やコード類をまとめあげて、なおかつスムーズに手足が稼働せねばならないため、どうしても平均女性よりは腕も足も肩幅も太くなる。小学校時代からずーっと砲丸投げやらハンマー投げやらをやっていたような体格である。やや太めの体育会系少女といった感じだろうか。

バストが大きいのは祖父の趣味らしい。

「男という奴はな。乳がでかいとどうしてもそちらに目がいくようになっておる。お前の身体はすべてつくりものだ。いろんなところをじろじろ見られてサイボーグだと見抜かれるのもよくない。だから乳をでかくしたんじゃ。なんじゃ、その目は。わしはいやらしい気持ちで乳をでかくしたのではないぞ。そんな目で見ろな、雅美」

と祖父は説明してくれた。

もっとも、この「乳」は内蔵された圧縮空気を調節することにより、大きくしたり小さくしたりできるらしい。

・・・その昔。アマゾネスという伝説の女性だけの国があったそうな。その国の女性戦士はな、弓をひくときに邪魔になるからといって、乳房を片方、切り落としておったそうな。「アマゾネス」というタイトルでテレンス・ヤングという監督が映画にもしているそうじゃ。その故事にならい、雅美にも胸を大きくしたり小さくしたりできる装置を内蔵したそうじゃ。

というどうでもいい知識をデータベースの中から持ち出してきて、雅美はむりやり納得した。

顔は・・・かわいい。体格はごついが、愛嬌のあるかわいい顔である。

この顔も祖父の趣味なのだろうか。子供のころの自分に面影が似ている。まあこれはいいか。鏡の前で頬をさわってみた。ぷるん。指をはじき返す弾力もある。頬も指を感じるし、指も頬を感じる。皮膚全体の内側に微弱な電流網が通されている。その電流網が神経系の代わりに肌に触れる刺激をCPUに伝えるのである。

笑ってみる。・・・かわいい。雅美は入院している頃の自分の顔がいやだった。

血行のわるい、青白い顔。

少しでも無理をすると、発作がおきて、唇は紫に、肌は土色になる。

その翌日は目の下にクマができる。

それがどうだろう。

肌の色は、運動部少女の初夏の顔色。適度に日焼けして、かといって黒いわけでもない。

髪はショートカット。健康的な肌の色によく似合っている。目はくりっと大きく、唇は薄いピンク。

機械でできている身体とはいえ、これまでの自分とは比べものにならないほど・・・

健康美にあふれてるやん。いけてるやん。

ひょっとしたら、この身体なら、念願の、大学に・・・

「そこでな、雅美」

(念願の、大学に・・・)

「お前の性能がどの程度なのか、実社会でテストすることになっている」

(実社会・・・というのと・・・念願の、ダイガクに・・・)

「いろいろと考えたんだが、我々が考え得る限り過酷な条件でテストするのがいいのではないかなと思ってな」

(過酷な・・・ダイガクに・・・ え?)

「お前の身体はあくまでもお前のものだが、開発の経緯というものもある。ある程度説得力のあるテスト結果が必要じゃ。テストが終了すれば、お前は内閣直属の特務エージェントとして世界を股にかけて活躍してもらわにゃならん」

大学と書いた巨大な石膏細工がぱりんと崩れた。がしゃがしゃと音をたてながら雅美の上に降ってきた。

「性能テストの受け入れ先企業とはもう話がついておる。明日からでも来てくれていいということだ。かなりきつい実地テストになると思うが、がんばってくれ」

「それって、どういう意味なん？」

「お前には明日からその会社で社員として働いてもらう。念のためバックアップスタッフを二名、先行して勤務させている。お前はそこのスタッフとして勤務してもらいたい。もちろん、お前がサイボーグであるということは絶対に秘密だ。繰り返すが、そこではかなり過酷で劣悪な勤務環境がまっているに違いない。しっかりやってくれ。これからのこの研究室の研究予算のためにも」

再び、頭がくらくらしてきた。結局なに？私は予算のためにどっかで働かされるってこと？

「おお、そうだ、雅美とスーパーコンピューターMASAMI、ちょっとまぎらわしくなってきたのでな、お前のコードネームを決めようと思う・・・」

・・・まあ・・・いいか。

今日から新しい自分の人生が始まる。それだけでも、白い壁の病室の中よりはずっとましなのかもしれない。今は身体が自由に動く。今は走ることができる。その幸せをまずかみしめよう。なんたって、私はサイボーグなんだもん。

「お前の新しい名前は中野雅代。MASAYOがお前のコードネームだ」

中野雅代。私の新しい名前。

そのときはまだ、雅美、いや雅代は自分に待ち受ける未来を何も知らなかった。

「何なの一、これは一ッ」

雅代は絶叫しそうになるのをすんでのところでこらえた。

「あにあんね、たうねん、きくきく、いああ」

「ひゅうたんたう、ひゅうちょ」

「ままないお。ままないお」

「ちっとでた」

まさに過酷な環境だった。

雅代は泣いていた。泣いたというのは心理的に泣いたというだけで、実際に涙がでたとか鼻水がたれたとかいうことはない。

日本語はもちろん、英語も、フランス語も、ドイツ語も通じない。彼らの言語はそのどれにも属さない、独自のものだった。その生物が十人、水着を着て雅代のまわりをうごめいている。

対する雅代は、武器もなく、水着一枚という格好で彼らに立ち向かわなければならない。

生物のうち一人が雅代にしがみついてきた。

「こーち、うんちでた」

同時に、あたりに漂う異臭。

「なんなのよ、これは一ッ」

叫びかけて、その声を飲み込んだ。そして雅代はその生物（＝幼児）にむかって微笑んだ。

彼らを手なずけるのが私の今日のミッション。

「過酷なテスト」の受け入れ先はスイミングスクール。

「サイボーグコーチ雅代」誕生の瞬間であった。

以下「サイボーグコーチMASAYO II」に続く。